

# 私立中学校 2017年度入試予測

2016年度も中学入試は20%近くの生徒が臨み、「活況」を呈しています。そのなかで大学入試改革を見越して私立中学校に向かう「私立志向」もみられました。近年の傾向であった「付属校人気のダウン」も情勢が変わりつつあります。2016年度の結果分析を押さえ、それに基づき、2017年度入試の「動向」や受験作戦などを探っていきましょう。

## 私立中の「存在感」高まり、上位校・人気校は激戦続く

まず、中学入試の首都圏全体の動向をみておきましょう。

首都圏（1都3県）では、2016年度に私立・国立の中学校や公立中高一貫校を受験した生徒は約6万1700人にのぼりました。ここから中学受験率（実受験者数÷小学校卒業生数）は約19.5%と推計され、ほぼ「5人に1人」が受験しています。

一方、少子化や長引いた不況の「逆風」で、私立中の受験生はこの8年ほど減少が続いていました。しかし2016年度は私立・国立中の総受験者（私立が主体）が4万5500人程度となり「前年（2015年度）から横ばいか若干増えた」と大手塾では推計。その減少に歯止めがかかりました。

また、下がり気味だった私立・国立中の受験率は2015年度から上昇に転じ、2016年度もやや上がり、この3年間は15.0%→15.2%→15.4%と推移しています。なお関西圏でも同様にこの率は2年連続で上がっています。

これらの要因の一つは、2021年度入試からの大学入試改革といわれます。「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」が始まり、それに記述式を導入するなど、思考・判断・表現といった知識の活用能力が重視されるようになります。2015年度に中学受験をした現・中2生以降が新制度の大学入試に臨むのです。

そのため、大学入試への対応でも信頼性の高い私立中がこれまで以上に求められているようです。そうしたなか、来春の2017年度には「私立中の総受験者は2016年度とほぼ同数か、やや増える」と予測されています。

とくに難関・上位レベルの学校や、大規模な学校改革などで評価を高めたところは2016年度に多くの受験生が集まり「激戦」が目立ちました。こうした人気校では2017年度も厳しい入試状況が続くのは確実とみられます。

## 埼玉、千葉などの1月入試 栄東は群を抜く「超人気」

では、主な学校の受験動向を「1月入試」が中心の埼玉、千葉県などからみていきます。

受験プランの主流は1月中に「試し受験」や押さえ校（すべり止め）の確保を行ったうえで、2月入試（東京、神奈川）に臨むというものです。その一方、最近「地元志向」もあり1月校を第1志望とする埼玉、千葉の受験生も増えています。

さて埼玉県では、ここ数年、栄東が「台風の目」となっています。2016年度に同校は5回の試験を行い、合計の受験者は8689人。前年に比べて826人減ですが、依然として超マンモス入試校です。

なかでも、同校のA日程は「大盛況」が続き、受験者4994人（前年比881人減）。この倍率は前年から横ばいの1.3倍。また、特進クラス選抜の「東大I」では受験者1767人（同70人減）、倍率は前



年と同じ2.9倍でした。

「東大Iは合格者全員を特待生とする」、「A日程でも特進の東大クラス合格を出す」、「複数回受験すると試験に20点を加点」といった同校の特長である制度は、2017年度にも一部を除いて継続されます（東大Iでは「加点制度」を廃止）。

開智では、4回の試験全てで受験者が増加しました。とくに特待・特進クラス選抜の「先端A」は468人増（593人→1061人）と大幅に増え、倍率は1.6倍→1.8倍に上昇。1回では合格者が多めに出され、倍率2.0倍→1.5倍にダウン。

立教新座の1回は近年、受験者減が目立ちましたが、2016年度は264人増（1298人→1562人）、倍率も2.0倍→2.1倍と上向いています。

一方、淑徳与野の1回では受験者268人増となったものの、合格者の増員によって倍率は前年と同じ1.8倍に。浦和明の星女子の1回も受験者が109人増えて（1790人→1899人）、倍率は1.9倍→2.0倍と若干上がりました。

千葉県の私立中入試は、ひと頃に比べて受験規模が縮小しています。2016年度には千葉の1月入試の延べ受験者数は約1万8000人、かたや埼玉ではその人数は約3万2000人でした。

千葉の入試開始日は1月20日で2月入試までの間隔が短いのに、埼玉は1月10日以降と日程が早く、東京などの「試し受験」層は千葉から埼玉にかなり流れているとみられます。

かつては受験者3500人台の「マンモス入試」といわれた市川の1回も規模は縮小。2016年度にこの受験者は2679人（前年比44人減）、倍率は男子枠2.1倍→2.0倍、女子枠2.6倍→2.5倍と若干下がりました。2017年度は1回同日に「英語選択入試」（国・算・英語A・B）を新設します。

東邦大付東邦の前期も受験者は62人減少（2301人→2239人）。倍率は前年と変わらず2.0倍。

県内最難関の渋谷教育学園幕張は、首都圏全体

でもトップレベルです。同校の1次では受験者90人増（1762→1852人）、合格者の増員により倍率は前年から横ばいの2.4倍でした。

昭和学院秀英の2回一般は、合格者の増員で倍率3.4倍→3.3倍とわずかに低下。

常磐線の沿線では2016年度に県立東葛飾高の併設中学校が開校。このため同沿線のエリアで新たな受験層が掘り起こされ、専修大松戸1回（91人増、倍率2.0倍）、芝浦工業大柏1回（69人増、倍率2.2倍）などで受験者増につながりました。

一方、茨城県の1月入試では、県内トップ校の江戸川学園取手は、受験者が1回110人減（930→820人）、2回も81人減。倍率は1回2.5倍→2.2倍、2回2.0倍→1.9倍となりました。

寮がある地方の学校の「首都圏会場入試」も1月に定着しています。2016年度は早稲田佐賀、土佐塾（高知）、早稲田摂陵（大阪）、西大和学園（奈良）、佐久長聖（長野）、秀光（宮城）、函館ラ・サール（北海道）、函館白百合学園（同）など約20校が1月に首都圏入試を実施。これらの受験者は合計で約8700人（非公表の学校を除く）でした。

## 2月校の状況をチェック 付属校の多くで受験者増

東京都、神奈川県私立中入試は2月1日に開始され、5日ごろに大半の学校で試験を終了します。上位校を中心に受験状況をみていきましょう。

**【男子校】** 2016年度に、男子御三家などでは、駒場東邦で受験者が66人減少（655人→589人）し、開成（40人減）も減りました。駒場東邦の倍率は2.4倍→2.1倍とやや低下。また神奈川の聖光学院（1回31人減・2回1人減）、栄光学園（29人減）も受験者数はダウン。

麻布は前年（2015年度）並みの受験状況に。一方、武蔵では受験者が71人増加（519人→590人）、倍率は2.8倍→3.2倍にアップ。同校はグローバル化への対応が好評といわれます。

ほかに進学校のなかで受験者が増えたのは、浅野（66人増）、暁星（50人増）、芝（1回45人増・2回71人増）、海城（1回34人増・2回30人増）、サレジオ学院（A21人増・B66人増）など。

レベルや地理的に近い武蔵、海城などに受験生が流れたのか、早稲田（1回40人減・2回36人減）では受験者が減っています。ただ同校は2016年春の東大合格者が38人に増加したため、2017年度は人気アップとなる可能性があります。

多摩地区の上位校・桐朋では2016年度に2回試

験（2月2日）を新設し、注目されました。定員の1・2回への振り分けにより、1回の倍率は1.9倍→2.9倍とかなり上昇。2回も多くの受験者（512人）が集まり、倍率2.5倍に。

桐朋2回の参入で影響を受けたのは、**東京都大付**2回（受験者114人減）のほか、**本郷**2回（同52人減）、**世田谷学園**2次（同35人減）、**城北**2回（同20人減）などとみられます。

大学付属校では、**慶應義塾普通部**の受験者が68人増加（510人→578人）。倍率は2.7倍→3.0倍とやや上昇。ほかに、**学習院**（1回21人増・2回18人増）、**立教池袋**（1回12人増・2回28人増）でも受験者がやや増えています。

**早稲田大高等学院中部**では受験者は前年に10人減、2016年度は29人減（376人→347人）、合格者の絞り込みで倍率は前年と同じ2.6倍。2017年度はやや反動が出て、受験者数アップとなるかもしれません。

また**明治大付中野**も2年連続で受験者減となりました（2016年度は1回36人減・2回32人減）。**【女子校】**上位女子校では2015年度に「サンデーショック」（ミッション校の試験日移動）という現象で2月1日、2日が特別な入試状況でした。このため女子校の1日、2日試験は前々年の2014年度と比べていきましょう。

2016年度に、女子御三家の**桜蔭**では2014年度に比べて受験者が22人増加（501人→523人）、**雙葉**は7人増で、**女子学院**は41人減少。**桜蔭**の倍率は1.9倍→2.0倍となり、ほかの2校も倍率はほぼ2014年度並みでした。

また**豊島岡女子学園**（1回）の受験状況も2014年度に近いものに（受験者1065人→1009人、倍率2.6倍→2.5倍）。

2014年度と比べて受験者が増えているのは、**東洋英和女学院**（A102人増）、**洗足学園**（1回114人増・2回172人増）、**フェリス女学院**（48人増）、**湘南白百合学園**（38人増）、**横浜雙葉**（37人増）、**吉祥女子**（1回29人増・2回116人増）、**大妻**（1回22人増・2回61人増）などです。

このなかで、**東洋英和女学院A**の倍率は2.0倍→3.0倍とかなり上昇。同校はNHKのテレビドラマ（「花子とアン」）で知名度が高まり、2015年春の好調な大学合格実績も影響したようです。

**洗足学園**2回、**吉祥女子**2回で急増となったのは、2016年度に**鷗友学園女子**（1次2月1日・2次同3日）が2日の試験を取りやめ、その受験層が両校に向かったことが要因といわれます。なお



**洗足学園**2回の倍率は3.0倍→4.0倍にアップ。

では、2月3日以降の試験は、前年の2015年度と比べていきます。

受験者が増加したのは、**洗足学園**3回（167人増・5日）、**吉祥女子**3回（84人増・4日）、**普連土学園**3次（71人増・4日）、**大妻**3回（66人増・3日）、**頌栄女子学院**2回（44人増・5日）など。

**洗足学園**は近年のレベルアップなどで遅い日程（3回）も高人気となりました。また、**鷗友学園女子**が4日の試験を廃止し、その影響が**吉祥女子**3回などに出たとみられます。

**【共学校】**大学付属校のなかでトップレベルの**慶應義塾中等部**は、前年（2015年度）に比べて受験者が41人増加（1080人→1121人）。ただ女子枠では減って、倍率は男子枠4.8倍→5.2倍、女子枠6.1倍→5.5倍となりました。**早稲田大系属早稲田実業学校**では受験者3人増、倍率はほぼ前年並みになっています。

ここ数年、受験者数のダウンが続いた**慶應義塾湘南藤沢**では「下げ止まり」となり、受験者が117人増。倍率は3.6倍→4.4倍に上昇。

また、**青山学院**では受験者225人増と大幅に増えました。倍率は男子2.6倍→3.1倍、女子3.1倍→4.7倍にアップ。このため2017年度は女子で敬遠層が出る可能性もあります。

2016年度に共学化した**法政大第二**は、予想された通り人気があぐと高まり、受験者は1回（242人増）、2回（183人増）とも急増。1回の倍率は前年の3.1倍から男子枠3.6倍、女子枠4.4倍、2回では4.7倍→同5.1倍、同5.2倍となり、合格難易度も上がりました。

このほか、**成城学園**（1回56人増・2回61人増）、**中央大附**（1回37人増・2回37人増）なども受験者が増加しています。

ここ数年、「付属校の人気ダウン」が指摘されていましたが、その傾向は変わってきて全体的に

付属校人気は「復調」に向かいつつあるようです。ただ、明治大付属校など受験者が減っているところもみられます。近年、減少が続く**明治大付明治**は2016年度に1回7人減・2回45人減。

**明治大付中野八王子**は1回58人減・2回37人減で、1回の倍率は2倍未満に（2.1倍→1.7倍）。

一方、共学のトップ進学校・**渋谷教育学園渋谷**（1回4人増・2回152人増・3回121人増）は、2・3回で受験者が急増しました。2015年春に東大合格者33人（2014年春14人）と躍進したことが要因です。2016年春も東大合格30人と「好結果」を維持したため、高人気が続くそうです。

### 午後入試受験も広がり、 2月は「前半戦」重視強まる

東京、神奈川の2月入試は1日、2日の「前半戦」が特に活発であり、3日以降になると試験を行う学校数や定員が少なくなります。

そうしたなか、最近では1日、2日を中心に「午後入試」を多くの中堅校などが実施。午後も使って併願の幅を広げる作戦が定番化しています。

2016年度には2月1日だけで午後入試の受験者は約2万1300人にのぼりました（大手模試業者の推定）。例えば、**日本大**はこの1日午後の枠を新設し720人の受験者を集まり、初めて午後入試を行った**跡見学園**では1日午後の受験者は261人、2日午後は133人でした。

2017年度には、**清泉女子学院**が2月1日に午後入試を導入し、**カリタス女子**はこれまでの1日午後に加え、2日午後にも新設します。

さて、近年の2月入試では「短期決戦化」の傾向が強まっています。午後入試も活用し、1、2日の「前半戦」で合格を手にして、3日以降は受験しない生徒がかなり増えているのです。

学校側では、そうした風潮に合わせ、1日や2日の合格枠を広げて、3日以降の「後半戦」で合格者を減らすという対応策が広がってきました。

このため、2016年度は「後半戦」の倍率が高まった学校が多く、一部に急上昇も出ています。例を挙げると、**山手学院**の後期（6日）2.0倍→12.6倍、**成蹊**2回の女子（4日）2.9倍→8.0倍、**広尾学園**3回（5日）3.2倍→10.2倍、**成城**3回（5日）4.8倍→9.1倍、**洗足学園**3回（5日）5.5倍→8.9倍などです。元々、高倍率の**豊島岡女子学園**3回（4日）は7.5倍→10.3倍、**吉祥女子**3回（4日）は9.3倍→13.0倍に。

「後半戦」（3日以降）が全体的に厳しさを増し

ており、1月中や2月1、2日の早い段階で合格を確保しておくことの重要性がより高まっているのです。それを意識して慎重に受験パターンを設定しましょう。

### 日程や入試科目に注意を 新タイプの試験も増える

2017年度入試の主な変更点などを挙げておきましょう。**芝浦工業大**（現・板橋区）は江東区豊洲の新校舎に移転し、校名を「芝浦工業大学附属」に変更します。また試験は3回とも4科から3科（国・算・理）に変わります。

入試日程では、**明治大付中野八王子**がこれまでの1回・2回（2月1日・3日）に加え、2月5日の試験（4科の総合問題）を新設します。

**共立女子**は2月4日だったC日程（算数・合科型論述）を3日に前倒しして、この定員を30人から40人に拡大。**三輪田学園**も3回を2月4日から3日に移し、逆に**光塩女子学院**は2月3日だった3回を4日へと1日後ろにずらします。

試験科目をみると、思考力・表現力などが重視される大学入試改革（2021年度）を見すえた新しいタイプの導入が目につきます。例えば、**桐朋女子**では2月2日に「論理的思考力&発想法入試」（言語分野・理数分野の記述型試験）を、**聖園女学院**は同3日午後に「総合カテスト」（総合力I・II）を、**大妻中野**は同4日に「新思考力入試」（合科型・算数・総合記述問題）を新設します。

近年、公立中高一貫校のテスト形式に合わせた「適性検査型」の試験が広がっており、2016年度は首都圏で50校以上が実施。適性検査とは、科目を超えた総合的な問題で、大学入試改革の趣旨にも沿うものです。2017年度は**京華女子**（2月1日）、**星美学園**（同1日午後）などで「適性検査型」試験を新たに取り入れます。各学校の入試日程や試験科目などをよく確認したうえで、受験プランを慎重に決定しましょう。

